
天空レストラン第1話

ときめき太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天空レストラン第1話

【Nコード】

N6449D

【作者名】

ときめき太郎

【あらすじ】

日本一高いビルにあるレストランで起こる様々な出来事を題材にした小説

レストラン（前書き）

晴れたり、曇ったり、雨が降ったり、雪が降ったり、窓から下界を見下ろすと、何時も違う東京が見える。

レストラン

晴れたり、曇ったり、雨が降ったり、雪が降ったり、窓から下界を見下ろすと、何時もと違う東京が見える。

新宿駅西口の超高層ビル群の中に日本一高いビルがある。ビルの名前は新宿レインボービルといい、主にオフィスビルであるが、最上階には、展望レストランがあり、そこからの眺望は、三百六十度のパノラマで首都東京の街を見ることができる。

店の名前かというと、天空レストランという風変わりな名前で、その名前から想像されるように、まるで店内の窓からの眺めは、天空から眺めているかのように絶景である。この二月に店は開店し、二ヶ月余りが経ったが一向に客足が途絶えない。今日も平日の四時半を廻っている時間で、普通、客足も夕食時にはまだ早い時間帯で少なくなる時であるが、ウェイティング客が出るほどの満席の状態である。

「今、ウェイティングは何組いる？」レストランの店長、岡野は厨房にホール係りの大学生アルバイト、三宅陽子呼び尋ねた。岡野はレストランの店長としてこの店を取り仕切っている。もともと大手ホテルのレストラン店長も務めたこともある、腕利きのホテルマンであった。ちょうどこのレストランがオープンするということを求人広告で知り、転職しこの店に来た。ここは日本一高いビルのレストランとはいえ、所詮中小企業のレストラン店長であり、その仕事内容也多岐にわたり、非常に仕事は激務である。岡野は仕事の激務に対しても、根っから飲食業を仕事にすることが好きなためか、一切苦にはならなかった。

岡野のウェイティングの問いかけに対し、三宅は「店長、十五組程です」と答えた。「十五組か、まだそんなにいるのか・・・」少し疲れた様子である。岡野がいる場所は、厨房の料理を出すデッシャーという場所であり、注文され作られた料理が、間違いなくお

お客様のテーブルに行くように確認し、ホール係りに手渡すポジションである。本来、店長といえば、ホールに出てお客様をテーブルへと案内しながら、レストラン全体を見ることが仕事である。しかし、近頃慣れない職員がデッシャーを担当し、注文のミスが相次いだため、特に忙しい時間など、自らこの場所に張り付いていたのだ。

岡野が三宅にウェイティングの確認をしてから一時間ほどが経った頃、三宅が血相を欠いた表情で岡野のところへ飛び込んで来た。「すみません店長、窓側希望のお客様を、内側の席へ順番を間違って案内してしまいました。間違われたお客様が怒っています」「すぐに空く窓側の席はないの？」三宅は泣きそうな表情で「窓側はほとんど注文待ちのカップルで、すぐに空きそうにありません」「そうだなあ、今から夜景が見える時間だからなあーしばらく空かないだろうな・・・」普通のレストランであれば窓側の席だろうが、内側の席であろうが、席に関して希望を述べる客は余りいない。しかし、このレストランは別である。ほとんどの客が眺望を主として来ているのである。決して窓から内側に、二列目、三列目の席が景色が見えないわけがない。だが、どうせ座るなら、客は待つても窓側へ座りたいのである。「ひとつ前に、窓側へ案内したお客様に、事情を言って、順番が変わってもらってもいいですか？」「それはだめだ、そんなことをしたら、今度はそのお客様が憤慨して、更に問題が大きくなる」「そしたら店長どうしたらいいのでしょうか？」「そうだなあ、奥の窓側の席へ案内しよう」岡野はすぐに答えを出し、三宅に言った。三宅は戸惑った表情で「店長、奥の窓側の席は夜景は見えないですよ」「夜景は見えないが、夕日は良く見えるところだろう」岡野が三宅に案内させようとした席は、普段はバーカウンターとして使っている。ホール係が普段立っている場所から、奥に入っており、ホール係の死角になりやすく、お客様の状態がわからず、オーダーミス等が発生しやすい席であるため、多客時でもわざと予約席のプレートを席に置き、客を案内していなかった。三宅ではこの問題を解決できないと判断した岡野は、すぐにホールに

出て、間違つて、窓側へ案内することができなかった客のところへむかった。順番を間違われた客は、五十代の夫婦で、たいへん憤慨している様子だ。

「私、店長の岡野と申します。私共の手違いにより、たいへん失礼いたしました」岡野は客の前で深々と頭を下げた。そして客に対し、「夜景が見える窓側の席は、只今満席でございます。奥の窓側の席しか空いております。この席は普段、この時間ご案内しておりませんが、

夕日は良く見える席でございます。もしよろしければ、そちらで夕日を見ていただいて、次に夜景が見える席が空きましたら、その席へご案内させていただきますが、よろしいでしょうか？」その岡野の声に怒っていた客も「わかった、わかった、それじゃそこでもいいから、早く早く、案内してもらおう、なにせ、三十分も待っているんだからな」それから一時間ほどが経ち、さきほど順番を間違われた客が、奥の窓側の席から、手前の夜景の良く見える席へ移り、食事を済ませ、精算のためレジの前に立ち、レジの女性に向かって、「店長を呼んでくれないか？」店長の岡野が奥から出て来る。「いやー店長あなたが言ったとおり、奥の席から見える夕日はすばらしかったよ。もし、あのまま順番を間違われずに、窓側の席へ座つたら、あんなにすばらしい夕日を見ることはできなかったよありがとう」本日は申し分けありませんでした」岡野は再び頭を下げた。

「何も謝ることはない、また今度あの席へ案内してもらえるかな？」お客は笑みを浮かべながら岡野に言った。「もちろんです、ぜひまた夕日のみえる席へ案内させて頂きますので、いつでも御利用下さいませ、お待ちいたしております」ほんの一時間前までは、あんなに憤慨していた客とは思えないほど、上機嫌な表情で帰って行つた。三宅はその客の帰る姿を見て、店長の客に対する対応の仕方に改めて関心し、自らももっと経験を積み、勉強しなければと思ったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6449d/>

天空レストラン第1話

2010年10月19日13時22分発行